創刊に寄せて

大学院実践真宗学研究科長
川　添　泰　信

龍谷大学大学院　実践真宗学研究科が2009年４月に創設されてから、2012年４月で４年目を迎えました。文系の修士課程で３年間の修学というのは、極めてユニークなシステムですが、それは実習を伴うということから必然的な修学年限でもあります。一期生が入学して以来、教員も院生もよりよい学びを求めて暗中模索をしながらの３年間の課程が修了し、本年、2012年３月に初めて修士の学位修了生を送り出すことができました。その学びの成果の一端を、『龍谷大学大学院　実践真宗学研究科紀要』として公開することになりました。

「宗教を社会で実践する」を標榜する実践真宗学研究科は、その修学の課程においてさまざまなことを学びますが、本紀要はその一端をまとめたものであります。現代社会では時代の要請として宗教の有用性が重視されます。いわば社会にとってどれだけ有用か否かがもっとも重要であるということです。そうでなければ宗教は歴史的意味を失い、社会から消え去っていくということです。確かに宗教が生きている人間の存在そのものを課題とするものである限り、現代に生きる人間の問題に答えられない宗教は、その存在意義を失い、歴史的存在価値を失うであろうと思います。しかし翻って考えてみると、宗教は社会的有用性のみが重要ともいえないのではないかと思います。なぜなら、宗教には普遍的真実を求めるという点があるからです。それは時代を超えて保持されるものであり、それゆえ宗教には、社会的な有用性が求められると同時に、真実の探究も求められると言うことです。言葉を換えて言えば、宗教は外なる世界と内なる世界を同時に問題とすると言うことであり、それは大変困難な課題です。実践真宗学研究科のもっとも重要な課題は、この有用性と真実性の両面を

同時に追求しようとするものであります。

今日、改めて大学院　実践真宗学研究科が開設された意図は、現代における宗教の社会的有用性と真実性の二つの課題を追求することが求められていると言うことであり、そしてもっとも重要な点は、この二つの課題を分離することなく同時即的に絶えず一体のものとして追求する点にあるのではないかと思います。今後、実践真宗学研究科に課される課題は、より多様化、複雑化する現代社会からより大きな問題が要求されてきます。我々は、困難な課題に目をそらすことなく、解決に向けて邁進していかなければならないと思います。